

神のみこころ

「しかし、彼を碎いて、痛めることは、【主】のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためにいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。」(イザヤ書53:10)

神のみこころの定義

聖書は通常神のみこころということばを三つの意味で使っている。

- (1) ある文では「神のみこころ」とは「神の律法」のことである。たとえばダビデは詩篇40篇8節で、「あなたのおしえ」ということばを「あなたのみこころ」と同じように使っている。同じように使徒パウロ(新約聖書の多くの教会を開拓した指導者で新約聖書の多くの手紙を書いた人)は神の律法を知ることは神のみこころを知ることと同じと見なしている(ロマ2:17-18)。神の律法は私たちが歩むべき道を教えているので、「神のみこころ」と呼ばれて当然である。「律法」は基本的に「おしえ」を意味し、文書になった神のことば全体を指している。したがって神のみこころは私たちと全世界に対する神のご計画と目的のことである。
- (2) 「神のみこころ」ということばは神の願いとして表されたものに用いられている。これは神が私たちに理想として望むこと、つまり神が最善で最高の目的とすることを指すので、神の「完全意思(完全なみこころ)」と呼ばれる。たとえばすべての人が救われること(1テモ2:4, ベテ3:9)、救いを受けた人が神との関係から離れないこと(→ヨハ6:40注)は啓示された神のみこころまたは願いである。この真理はだれもがみな救われることではなく、だれもが靈的に救われるのを神が願っておられることを意味している。実際にには神が願っておられる最善のことを人間はしばしば拒むのである。

- (3) 「神のみこころ」とは神が特に願ったりさせたりしてはいないけれども、起こるのを許されたこともある。これは「神の許容意思(許されたみこころ)」と言われるものである。実際にこの世界に起きていることの多くは神の完全なみこころに反している(一致していない、反対)。たとえば神は罪、情欲、暴力、憎しみ、神への抵抗などに反対される。けれども神は悪がしばらくの間続くことを許しておられる。神は神を信じるように、または御子イエスを受入れるようにだれにも強制をされない。主イエスに自分の生活をゆだねるかどうかは自分で決めることである。私たちは神との関係を拒んで、靈的に失われて永遠のさばきを受ける状態にとどまることもできる。別の例として神は現在の世界で多くの問題や悪が起り、私たちの人生に影響を与えるのを許しておられる(1ペテ3:17, 4:19)。それは人類が神に逆らった結果続いているものである。これらのものは必ずしも神の願いや最高の目的ではない(→1ヨハ5:19注, →「神の摂理」の項 p.110, 「正しい人の苦しみ」の項 p.825)。

神のみこころへの応答

神のみこころについての聖書の教えは単なる教理(教え、信条)や靈的原則ではない。神のみこころは私たちの毎日の生活に具体的にかかわるものである。

- (1) 神の完全なみこころが何であるかを学ばなければならない。みことばを学んで聖書(律法を含む)に啓示されていることを知らなければならない。私たちは邪惡な時代に住んでいるので「主のみこころは何であるか」(エペ5:17)を悟らなければならない。私たちのために神が計画されたことは既にみことばに啓示されていることに矛盾しない。

- (2) どのように生活することを願っておられるかを神はみことばの中に示された。それを知ったら私たちのための神のみこころと目的に従うように心と思いを定めなければならない。たとえば詩篇の記者は「あなたのみこころを行うことを教えてください」と神に求めている(詩143:10)。続いて同じ思いを別のことばで言い表して「平らな地に私を導いてくださるように」と祈っている。それは正しいことを行えるように神

の助けを求めているのである。パウロはテサロニケのキリスト者が性的不道徳を避けて聖く立派な生活をして神のみこころに従うことを期待している(1 テサ4:3-4)。ほかの箇所でパウロは、キリスト者が神のみこころを知る知識で満たされるように、そして「主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれるようにと祈っている(コロ1:9-10)。

(3) キリストは弟子たちに神のみこころが行われるように祈ることを教えられた(⇒マタ6:10, 26:42, ルカ11:2, ロマ15:30-32, ヤコ4:13-15)。それは神の完全なみこころが私たちの生活や家族(→マタ6:10注)、そして世界で成就するように強く願うことである。そのように願うなら神がしてほしいと願っておられることを実際にやって表さなければならない。このことに私たちが祈り、献身するなら、私たちの現在と未来は神の守りの手の中にあることを確信することができる(⇒使18:21, 1コリ4:19, 16:7)。けれどももし罪や反抗心があるなら、神は祈りに応えてくださらないことを知らなければならない(→「効果的な祈り」の項 p.585)。自分自身の生活の中で神のみこころを行おうとしないなら、みこころが天で行われるよに地上でも行われることを(キリストが自身がマタイ6:10で祈られたように)期待することはできない。

(4) 罪との戦いに関心を持たず無責任な態度をとり、その弁解として神のみこころを引合いに出してはならない。つまり現在の状態は神が願っていることで、自分たちは何もできないという態度をとってはならないのである。私たちは罪、悪、靈的怠惰、妥協と絶えず戦い続けなければならない。現在世界にある残酷さと不公平の責任は神ではなくサタンにある(→ I ヨハ5:19注)。人々が体験している痛みと苦しみの多くを引起こしているのはサタンである(⇒ヨブ1:6-12, 2:1-6; ルカ13:16, IIコリ12:7)。主イエスが悪魔の働きを打壊するために来られたように(I ヨハ3:8)、キリスト者が悪との戦いを進めることは明らかに神のみこころである。キリストのメッセージを聖霊の力によって広めることと、靈的領域で悪の力に抵抗して自分の立場をしっかりと守ることによって私たちはこのことを行うのである(エペ6:10-20, IIテサ5:8, →「キリスト者とこの世」の項 p.2437)。

（註）前回の著者による「五」は、この「五」を指す。神のみこころの頃、神への直接的な反抗である。これが原因で、この頃、神の御心が、普段の心から離れておらず、神の神なりはむしろ順應的體（英語：*compliant*）である。従つて天皇の御心であり、御心の神の御心である。

（註）「御前御内」の「内」は、内侍の意で、天皇の内親王を指す。天皇の内親王の御内と、天皇の御内とは、別物である。